

東洋哲学研究所の歴史と役割

川田洋一

東洋哲学研究所の歴史と役割を述べるにあたって、次の三項目にわけて記していきたい。第一に「当研究所設立の意義と構想」、第二に「今日までの歴史」、第三に「現状と未来―その役割」の三項目である。

一 研究所設立の意義と構想

第一の設立については、池田SGI会長が一九六一年二月、初訪印で釈尊成道の地ブッダガヤを訪問した折り、当研究所の設立を構想されている。設立の意義と構想については、『新・人間革命』に詳細に語られて

いるので、少々、長文になるが、その部分を引用したい。

「アジアには上座部の仏教もあれば、ヒンズー教やイスラム教もある。また、そうした宗教を土壌として、さまざまな民族の文化、伝統が形成されている。牧口先生は、『認識しないで評価してはいけない』と言われているが、現在の日本では、それらの宗教や文化に対して、ほとんど正しい認識がなされていない。そこで、まず、アジアの宗教、文化、民族性について研究し、正しく認識していくことが、アジアを理解していくう

えでも大切なことではないかと思う。さらに、日蓮大聖人の仏法を弘めるうえからも、法華経を中心に研究を重ね、仏法の人間主義、平和主義を世界に展開していける人材を育む必要がある。それらをふまえ、東洋の哲学、文化、民族の研究機関を設立していきたいと思う」(『新・人間革命』第三巻三一五―三一六頁)

創立者の発言のなかに、当研究所の設立の意義並びに構想は明瞭である。論点を整理すると、

- ①アジアの宗教・文化・伝統(民族性)の認識
- ②『法華経』を中心とした研究

③仏法の人間主義、平和主義を世界に展開。

ここにいう、アジアの宗教・文化・伝統とは、南伝、北伝仏教、チベット仏教のみならず、中国の儒教、道教、日本の神道、並びにインドのヒンズー教、さらにイスラム教、キリスト教等をさしている。

『法華経』を中心とした研究においては、文献学的、学術的研究を基礎にして、その内容の分析と展開を含んでいる。展開まで含むということは、その研究が③の仏法の人間主義、平和主義に連動していくからであ

第二期は、一九八六年六月から今日までである。

第一期と第二期の性格を考えて、一応、第一期を「準備期間」、第二期を「基盤形成期間」として位置づけてみたい。

第一期は、ブッダガヤ訪問の折りの構想をもとに、翌一九六二年一月、「東洋学術研究所」として発足し、さらに一九六五年十二月には、財団法人「東洋哲学研究所」として、

こ、

されている。

一年に東京・渋谷区に研究所が
十年間で、制度的にも、内
しながら、徐々に方向性

『誌』『東洋学術研究』
役員制度を確立し、
ている。学術活
にわたり、シ
九年八月に
を派遣し
ることを意味しないし、常に衆生を

る。

ゆえに、③の意味するところは、『法華経』を中核とした仏法を基盤とし、土壌として、「人間主義」「平和主義」の理論を構築・創造し、展開していく方向性である。

したがって、仏法を源泉として展開してゆく分野は、平和、人権、地球環境、経済、社会、現代科学から、教育、倫理、にまで及ぶことが要請されている。要約していえば、「人類的課題」への対応であり、その超克のための理論の創出である。

この点において、仏法の使命とする人類生存と繁栄への貢献と、当研究所の設立意義が一致するのである。

『新・人間革命』に明記された創立者の設立の期待を、現実のものとするべく、当研究所は、構想の発表からこれまで約四十年に近い歴史を刻んできた。今、その歴史を、次の二つの期間に区分して述べたいと思う。

二 今日までの歴史

第一期は、一九六一年二月から一九八六年五月まで、

しかし、この期間の学術内容として特筆すべきは、①『法華経』、『維摩経』、『勝鬘経』の一字索引の発刊、②SGI会長の『仏教・西と東』、『仏教思想の源流』等の出版である。

『法華経』等の一字索引の発刊は、以後の『法華経』研究の端緒となっている。また、SGI会長の著書は、仏教の誕生からシルクロードを通っての流伝の歴史を、思想的に分析したものであり、以後の当研究所の仏教研究の基盤をなしていくのである。

第二期の開始は、一九八六年六月、現在の地(八王子市)に研究所が移転した時である。創立者の当初の構想を、着実に現実化しゆく段階に入ったのである。

すなわち、アジアの各宗教(関連するキリスト教、イスラム教も含めて)の研究を踏まえて、第二期では、それらの研究をさらに進めながらも、『法華経』の研究を中心にしての仏法の平和主義、人間主義の内実を構築しつつ、世界の諸機関との「連帯」をなしうる段階に入ったのである。

「基盤形成期間」と位置づけた現在までのほぼ十数年

えでも大切なことではないかと思う。さらに、日蓮大聖人の仏法を弘めるうえからも、法華経を中心に研究を重ね、仏法の人間主義、平和主義を世界に展開していく人材を育む必要がある。それらをふまえ、東洋の哲学、文化、民族の研究機関を設立していきたいと思う」(『新・人間革命』第三巻 三一五―三一六頁)

創立者の発言のなかに、当研究所の設立の意義並びに構想は明瞭である。論点を整理すると、

①アジアの宗教・文化・伝統(民族性)の認識

②『法華経』を中心とした研究

③仏法の人間主義、平和主義を世界に展開。

ここにいう、アジアの宗教・文化・伝統とは、南伝、北伝仏教、チベット仏教のみならず、中国の儒教、道教、日本の神道、並びにインドのヒンズー教、さらにイスラム教、キリスト教等をさしている。

『法華経』を中心とした研究においては、文献学的、学術的研究を基礎にして、その内容の分析と展開を含んでいる。展開まで含むことは、その研究が③の仏法の人間主義、平和主義に連動していくからであ

る。

ゆえに、③の意味するところは、『法華経』を中核とした仏法を基盤とし、土壌として、「人間主義」「平和主義」の理論を構築・創造し、展開していく方向性である。

したがって、仏法を源泉として展開してゆく分野は、平和、人権、地球環境、経済、社会、現代科学から、教育、倫理、にまで及ぶことが要請されている。要約していえば、「人類的課題」への対応であり、その超克のための理論の創出である。

この点において、仏法の使命とする人類生存と繁栄への貢献と、当研究所の設立意義が一致するのである。『新・人間革命』に明記された創立者の設立の期待を、現実のものとするべく、当研究所は、構想の発表からこれまで約四十年に近い歴史を刻んできた。今、その歴史を、次の二つの期間に区分して述べたいと思う。

二 今日までの歴史

第一期は、一九六一年二月から一九八六年五月まで、

第二期は、一九八六年六月から今日までである。

第一期と第二期の性格を考えて、一応、第一期を「準備期間」、第二期を「基盤形成期間」として位置づけてみたい。

第一期は、ブッダガヤ訪問の折りの構想をもとに、翌一九六二年一月、「東洋学術研究所」として発足し、さらに一九六五年十二月には、財団法人「東洋哲学研究所」として設立許可されている。

この期間は、一九七三年に東京・渋谷区に研究所が移ってからを含み、ほぼ二十年間で、制度的にも、内容的にも、試行錯誤を繰り返しながら、徐々に方向性が定まり始めた期間である。

制度的には、一九六二年に機関誌『東洋学術研究』第一号が発刊されている。また、研究員制度を確立し、一九八五年には第一回学術大会を行っている。学術活動としては、一九七八年、七九年の二回にわたり、シルクロードの仏教遺跡を視察、また一九七九年八月には、イタリアでの国際宗教社会学会に研究員を派遣している。

しかし、この期間の学術内容として特筆すべきは、①『法華経』、『維摩経』、『勝鬘経』の一字索引の発刊、②SGI会長の『仏教・西と東』、『仏教思想の源流』等の出版である。

『法華経』等の一字索引の発刊は、以後の『法華経』研究の端緒となっている。また、SGI会長の著書は、仏教の誕生からシルクロードを通っての流伝の歴史を、思想的に分析したものであり、以後の当研究所の仏教研究の基盤をなしていくのである。

第二期の開始は、一九八六年六月、現在の地(八王子市)に研究所が移転した時である。創立者の当初の構想を、着実に現実化しゆく段階に入ったのである。

すなわち、アジアの各宗教(関連するキリスト教、イスラム教も含めて)の研究を踏まえて、第二期では、それらの研究をさらに進めながらも、『法華経』の研究を中心に、仏法の平和主義、人間主義の内実を構築しつつ、世界の諸機関との「連帯」をなしうる段階に入ったのである。

「基盤形成期間」と位置づけた現在までのほぼ十数年

間の歴史を、当研究所の、①海外各センターの開設、②世界の各研究機関との学術交流協定締結、③国際シンポジウムの開催ならびに研究員派遣、④国内学術交流、⑤日中学術者交流、⑥出版活動、にわけて報告したい。なお、研究体制・内容・講演会等については、第三項目で述べる。

①海外センターの開設

- (1) 一九八九年五月、イギリス(タブロー・コート)にヨーロッパ・センター。
- (2) 一九九二年二月、ニューデリー(インド文化会館)にインド・センター。
- (3) 一九九六年五月、香港(香港総合文化センター)に、香港・センター。
- (4) 一九九七年五月、サンクトペテルブルク(ロシア科学アカデミー東洋学研究所内)にロシア・センター。
- ②学術交流協定
- (1) インド文化国際アカデミー(理事長 ロケッシュ・チャンドラ)。一九九二年二月。
- (2) 中国社会科学院世界宗教研究所(所長 吳雲貴)。一

九九二年十月。

- (3) アジア協会(所在地・インド 事務局長 チャンダン・ロイチョードリ)。一九九六年八月。
- (4) ロシア科学アカデミー東洋学研究所(所長 エヴゲニー・I・クチャーノフ)。一九九六年十一月。
- (5) モントリオール大学東アジア研究所(所長 クロワ・コントワ)。一九九八年三月。
- ③国際シンポジウムの開催ならびに研究員派遣
- (1) 東哲三十周年記念・日印合同シンポジウム(ネルー記念館)。一九九一年八月。
- テーマ「二十一世紀における東洋思想」
- (2) 当研究所ロシア・センター開所記念日露合同シンポジウム(ロシア・センター)。一九九七年五月。
- テーマ「二十一世紀と宗教」
- ④国内学術交流
- 一九九三年九月より九五年まで、南山大学南山宗教文化研究所と交流、「キリスト教と仏教」をテーマに合同シンポジウム(十二回)。「カトリックと創価学会」の出版。

⑤日中学術者交流

- (1) 当研究所にて講演会
 - ・ 一九八七年五月、桜宇烈 北京大学教授
 - 「中国伝統文化における三教融合の問題」
 - ・ 一九八八年一月、卿希泰 四川大学教授
 - 「道教発展史の時代区分問題について」
 - 陳徳述 四川省社会科学院文化研究所所长
 - 「清初思想家たちの王陽明心学に対する改造」
 - ・ 一九八九年七月、
 - 李遠国 四川社会科学院哲学文化研究所
 - 助理研究員
 - 「四川地区仏教の現状」
 - ・ 一九九二年十月、
 - 楊曾文 中国社会科学院世界宗教研究所教授
 - 「中国における仏教研究の現状」
 - ・ 一九九七年十二月、楊曾文 同教授
 - 「中国仏教と日本仏教」
- (2) 中国社会科学院世界宗教研究所訪問
- 一九九六年六月、旅順博物館において『法華経』

写本の写真撮影、ならびに同年九月、北京大学宗教学部開設シンポジウムの折り(川田等)。

一九八五年八月、一九九五年四月、九八年十月に研究員(菅野)が訪問。

⑥出版活動

- 一九八七年七月より、英語版『東洋学術研究』(THE JOURNAL OF ORIENTAL STUDIES) 発刊。
- 一九八八年六月、『内なる世界—インドと日本』(池田大作・カラン・シン対談)
- 一九九〇年十二月、『仏教—調和と平和を求めて』(ヨハン・ガルトウング著)
- 一九九〇年
- 『脳死問題と仏教(英語版)』池田大作
- 『環境問題と仏教(英語版)』池田大作
- なお、特筆すべきことは、一九九四年一月に『法華経』原典の写本を研究、刊行するプロジェクト会議、研究委員会が発足したことである。その成果並びに将来計画については、第三項目で述べる。

三 現状と未来—その役割

① 研究体制とその内容

② 『法華経』原典出版

③ 展示会ならびに各種シンポジウムの開催

の三点について述べていく。

① 研究体制とその内容

現在、八プロジェクトで研究を進めている。研究員をキヤップに、委嘱研究員をも含めながら、仏法を基調とした学問の構築・創出に向かっている。

第一プロジェクトのテーマは「日蓮仏教」。ここでは、『日蓮大聖人御書全集』の文献学的研究、ならびにそれを基盤にしての日蓮教学の学問的研究。

第二プロジェクトのテーマは「法華経」。「法華経」、天台の三大部の文献学的研究、ならびに思想的展開の研究。

第三プロジェクトのテーマは「人権・宗教と国家」。仏教思想と人権、信教の自由、ならびに宗教と国家を

めぐる研究。

第四プロジェクトのテーマは「宗教とヒューマニズム」。仏教ヒューマニズムの構築と、その視座からの比較思想の研究。各文明の基盤をなす儒教、道教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教の思想も対象となる。

第五プロジェクトのテーマは「生命倫理と宗教」。尊厳死、自殺、脳死、人工授精、体外受精、人工中絶等が具体的なテーマである。

第六プロジェクトのテーマは「地球環境と宗教」。各宗教の自然観、環境観、ならびに仏教思想との比較。地球環境との関連についての研究。

第七プロジェクトのテーマは「国際社会におけるSGI運動」。現地からの報告・資料に基づき、SGI運動の直面している課題の分析。

第八プロジェクトのテーマは「宗教と女性」。各宗教における女性観の歴史的展開、ならびに『法華経』、日蓮仏教における「女性解放思想」の研究。

以上のプロジェクトは、仏教思想の貢献しうる多くの分野を含んでいるが、現在のところは、まだ十分に

はない。今後、倫理、経済、教育、平和・非暴力の分野を徐々に補強しながら、総合的に当研究所の掲げる「仏教の人間主義・平和主義」の理論構築・創出をめざしていきたい。

② 『法華経』原典出版

第一、第二プロジェクトに関連する出版事業である。この写本シリーズは、一九八四年、王震中日友好協会名誉会長（当時）から、北京民族文化宮所蔵の『法華経』写本の写真版が贈られたことが契機となっている。

このシリーズの第一回、『旅順本法華経』の出版に際して、北京大学季羨林教授は、中国の「天人合一」とインドの「梵我一如」の同一性を論じ、戸田城聖創価学会第二代会長の獄中での『法華経』による悟達を位置づけられている。

SGI会長は、写本研究の学問的意義について分析したあと、『法華経』の伝播史から、歴史の「教訓」を引き出すことによって、地球上の多様な文化圏の差異に応じて、それぞれの特質を生かしながら、包括的に

「人類意識」を涵養する方途をさぐることも可能になる」（『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡（写真版及びローマ字版）』、旅順博物館・創価学会、一九九七年）と、「人類意識」形成への貢献を論じている。

この出版事業は、第二回ネパール本の出版（一九九八年）、第三回新疆・カダリク出土（一九九九年予定）、第四回西夏本（二〇〇〇年に予定）、その他、ケンブリッジ本を決定している。

③ 展示会ならびに各種シンポジウムの開催

一九九八年十一月、当研究所とロシア科学アカデミー東洋学研究所（サンクトペテルブルク）との共催で「法華経とシルクロード」展を開催した。「ペトロフスキー本」法華経をはじめ、「羅什訳・漢文法華経」や西夏語、ソグド語などの文献（四十七件）が展示された。いずれもオリジナルとしては海外初公開であった。

また、開催に寄せて、「法華経とシルクロード」のテーマで、『法華経』にみる菩薩の精神（ロシア、マルガリータ・I・ヴォロビョヴァ）、「法華経」と西夏王国

(ロシア、エヴゲーニイ・I・クチャノフ)、「二十一世紀」と『法華経』の光彩」(インド、ロケッシュ・チャンドラ)の講演があった。

本日、中国社会科学院世界宗教研究所と当研究所の共催で、『法華経』をテーマにシンポジウムを行うことは、以上のような当研究所の足跡の上に、新たな歴史を飾りゆくものと考えている。中国・日本の『法華経』史をめぐるシンポジウムのなかから、私どもは、貴研究所の方々から、貴重な智慧を学びとらせていただきたい。

当研究所は、明年(二〇〇〇年)の夏、カナダ・モントリオール大学主催の国際アジア・北アフリカ研究学会(ICANAS)で、『法華経』のセッションを担当する予定であり、そこでは『法華経』史を踏まえながら、人権・平和・非暴力・環境等の「人類的課題」への貢献のあり方をも提示したいと考えている。

『法華経』は、巻末にいたって、普賢菩薩が多くの眷属とともに宝威徳上王仏の国よりこの娑婆世界に到来している。日蓮大聖人は、「普賢」について、「普とは諸

法実相・迹門の不变真如の理なり、賢とは智慧の義なり本門の随縁真如の智なり」(『日蓮大聖人御書全集』、創価学会、一九九八年、七八〇頁)と述べている。つまり、普賢には不变真如の理と随縁真如の智が含まれていると示されている。ゆえに、「此の法華経を閻浮提に行ずることは普賢菩薩の威神の力に依るなり」(同頁)といわれるのである。

当研究所が、二十一世紀にむけて新たな飛躍への段階を迎えようとする時、貴研究所の方々を、中国より到来された「普賢菩薩」として深く尊敬し、お迎えしたい。

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)